



独立行政法人 国立病院機構

村山医療センターニュース



Vol. 90

2026.8 月発行

Topics 第3回脊髄損傷を語る会

特集 あれから10年、夢の続きを抱えて
頸髄損傷とともに生きる



第3回脊髄損傷を語る会(令和8年7月4日)

理念 患者さんの視点に立ち、良質で高度な医療を提供します。

基本方針 患者さんの権利と意思を尊重します。安全で優しいチーム医療を提供します。
倫理を重んじ高度で先進的な医療を提供します。地域医療連携の促進を図ります。
骨・運動器疾患の臨床研究を推進します。職員は研鑽に励み、健全な経営に努めます。

独立行政法人国立病院機構

村山医療センター 〒208-0011 東京都武蔵村山市学園2-37-1

TEL 042-561-1221(代) FAX 042-564-2210 URL : <https://murayama.hosp.go.jp/>



特集 再会 ～頸髄損傷、ともに戦う～

あれから10年、夢の続きを抱えて ～頸髄損傷とともに生きる～

卒業文集に、将来の夢は「体操でオリンピック」と書いた。青年はその後、体操経験を生かしてサーカスの舞台に立ち、バク転や宙返りなどのアクロバット演技を披露していた。形や場所は変わっても、青年の夢、その喜びは、身体を動かすことの中にあった。

2016年、演技中の事故は、身体の自由だけでなく、夢という名の生きる希望と喜びを一瞬で奪った。頸髄損傷だ。

あれから10年。今、その青年が、車いすラグビーのアスリートとして、そして夫となり、父となって当院に戻ってきた。青年の名は、荒武優仁（あらたけまさひと）選手。彼の夢は、車いすラグビーでパラリンピック出場とメダル獲得だ。あの頃には見えなかった夢の続きを、自分の人生として抱えての再会だった。



身体を動かす喜びが、生活を動かした

その現在にたどり着くまでの道は、平坦なものではなかった。受傷後の荒武さんは、起立性低血圧に悩まされ、車いすに乗ることさえ難しかった。「もう立てない」と医師に宣告された後も、いつかまた歩けるのではないか。以前のように身体を動かせるのではないか。そうした思いを、簡単に手放すことはできなかった。誰も約束してくれない希望で、自分を支えるのが精いっぱいだった。やりたいことなど思い浮かばない。打ち込めるものなど見当たらない。

転機は、リハビリ中に療法士から薦められた車いすラグビーだった。競技用の車いすは軽く、動かしやすかった。動ける。身体を動かせる。荒武さんは、その感覚がうれしくてしかたがなかった。夢中になって競技用車いすに乗った。「転んでもいいよ。ぶつかってもいいよ」それは、それまで誰もくれなかった言葉だった。



車いすラグビーは、荒武さんに再び、自分の身体で挑む場所を与えた。競技を続けるために、練習へ通う方法を考え、移動手段を整え、仕事や生活の形を変えていった。車いすラグビーが生活の一部に加わったのではない。競技を続けようとするのが、荒武さんの生活そのものを動かしていった。現在はスポーツ雇用という形で企業に所属し、車いすラグビー選手として競技に打ち込んでいる。

病室では見えなかった今

荒武さんは結婚し、父になった。1歳の男の子だ。「結婚もできる。子どももできる」入院中にかげられ、今も荒武さんの心に残っている言葉だ。車いすラグビーに出会い、仲間ができ、仕事ができ、家族ができた。かつて遠すぎて見えなかった未来が、今は日々の生活になっている。

これは、特別な奇跡の話ではない。朝が来て、練習へ向かい、家に帰れば子どもがいる。妻と協力しながら、ミルクを飲ませ、寝かしつけた。よく動くようになるとおむつ替えは難しくなった。それでも、父として、できることを一つずつ増やしている。うまくいくことばかりではない。けれど、その生活のひとつひとつが、かつて病室では想像できなかった現在なのだ。

あの言葉は、励ましだったのかもしれない。けれど、10年が過ぎた今、あの言葉は、荒武さんの生活の中で静かに本当になっていた。



再会、実りのとき

病棟では、当時の荒武さんを知る看護師が声をかけてくる。立ち話だけでは終わらない。入院していた頃のこと、退院してからのこと、車いすラグビーのこと、家族のこと。積み重ねてきた時間と想いが、お互いの言葉となってあふれ出す。再会の喜びが、そこにはある。

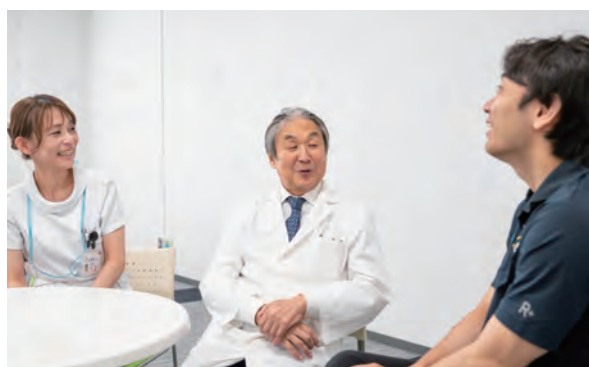
病院は、患者さんを送り出す場所だ。目の前にいるのは、かつて心配しながら送り出した患者さんではない。競技に打ち込み、家庭を持ち、父となって戻ってきたひとりの人だった。荒武さんの再訪は、あの頃の続きではなく、あの頃を越えてきた人の現在だった。

看護師には、退院調整という仕事がある。それは、頸髄損傷の患者さん一人ひとりの生活に耳

を澄ませる仕事でもある。退院の先には、自宅での暮らしがあり、家族があり、仕事や社会とのつながりがある。何を大切にし、どこで、誰と暮らしていくのか。看護師は、患者さんやご家族の声に耳を傾けながら、ともにその道を探していく。今、目の前にいる荒武さんも、そうして10年前に送り出した一人だった。医療関わった時間は、その人の人生の先に静かにつながっていた。そう感じられる再会だった。それは、当時を知る医師や看護師にとって、実りを受け取るような喜びの時間だったのかもしれない。



未来へ、ともに歩む



けれど、この再会は、物語の終わりではない。荒武さんは、夢を追いかけて、今も夢の途中にいる人だ。その夢は、車いすラグビーのコートの中にあり、家族との日々の中にある。夢は、誰か一人で完結するものではないのかもしれない。パラリンピックを目指すその夢のそばには、ともに競う仲間がいる。妻がいる。子どもがいる。夢

を追いかける父の背中を、子どもに見せたいという想いもある。

頸髄損傷によって、夢は一度潰れたかに見えた。けれど、その夢は終わらない。形を変え、場所を変え、荒武さんとともに、今も広がり続けている。荒武さんは、競技や家族との日々を重ねながら、iPS細胞を用いた再生医療の進歩にも期待を寄せている。今日の生活を支えること。未来につながる医療を前へ進めること。その両方を担うことが、当院の歩む道である。

頸髄損傷とともに生きる人がある。その人を支える家族がある。医療の進歩を待ちながら、今日を生きる人がある。

私たちはこれからも、頸髄損傷に向きあう人たちと、ともに歩んでいく。



脊髄損傷とは



脊髄は脳からの「手足を動かす・痛みやしびれを感じる」といった信号を、手足の細い神経に伝える働きをもちますが、強い外力などで背骨の骨(脊椎)が折れたり、ずれたりすると、その中に入っている脊髄も一緒に損傷されてしまい、脊髄損傷という状態になります。

脊髄損傷は日本では、年間で約5000人の新規患者が発生しています。発症は60歳以上の高齢者に多く、損傷部位は多くが頸髄の損傷であり約60%を占めます。受傷の原因は、交通事故、転落、転倒などさまざまですが、高齢化が進む日本では高齢者の転倒による受傷が年々多くなっています。

脊髄損傷の程度は、「完全損傷(損傷部位以下の運動・感覚機能が完全に消失)」と「不全損傷(損傷部位以下の運動もしくは感覚機能が部分的に残存している状態)」に分けられます。さらには運動・感覚神経の麻痺の程度から重症度が細かく分類されます(Frankel分類や米国脊髄損傷協会(ASIA)機能障害尺度が使用されます)。受傷時の麻痺がより重症であり、時間が経っても(8週間以上)麻痺が改善してこないケースでは、機能回復の予後が悪いことが知られています。

治療としては、まずは生命を維持するための治療をおこないます。状態が落ち着いたら、脊椎や脊髄の環境を整えるため除圧や固定手術をおこないます。しかしながら、脊髄損傷を直接的に治すことはできません。あくまでも二次損傷(損傷部位の不安定性や圧迫が残ることで、さらに損傷が広がってしまうこと)の予防や、リハビリテーションをスムーズに導入するための手術となります。そして、急性期の時期が過ぎるとリハビリテーションが治療の主軸になります。筋力訓練や筋促通訓練、関節可動域訓練から、座位耐久性訓練や基本動作訓練など、麻痺の程度に合わせてプログラムを組み、一つでもできることを増やすために、そして自立して生活できるように訓練を行います。リハビリテーションをおこなっても、麻痺が改善せず障害が残ることもあります。しかし、残った機能を最大限に活かすためにも、時間をかけてしっかりと訓練に取り組むことが大切です。

近年、iPS細胞や肝細胞増殖因子(Hepatocyte growth factor: HGF)などを用いた脊髄再生医療の研究が進み、当院でもさまざまな治験が進行中です。脊髄損傷は、今なお完治の難しい重い障害です。しかし、再生医療やロボット技術、AI・IoTを活かしたデジタル化による生活支援は着実に進歩を続けており、かつては望めなかった回復や自立が、少しずつ現実のものになりつつあります。

第3回 村山医療センター 「脊髄損傷を語る会」を 開催しました



令和8年7月4日(土)、当院の研修室およびオンラインのハイブリッド形式にて、「第3回 村山医療センター 脊髄損傷を語る会」を開催しました。本会は当院と日本せきずい基金との共催で行われ、会場・オンラインを合わせて150名を超える方々にご参加いただきました。

当院でリハビリを行い、社会復帰を果たされた脊髄損傷当事者やご家族から、経験や思いを語っていただくことで、医療者では気づきにくい視点や支援のあり方について学び、脊髄損傷への理解を深めることを目的として開催しています。

当日は、3組の当事者・ご家族にご登壇いただきました。

齋藤様ご夫妻からは、退院後も積極的に外出し、多くの仲間とのつながりを広げながら生活されている様子をご紹介いただきました。旅行先で撮影された数々の写真からは、車いすであってもさまざまなことに挑戦できることが伝わり、参加者に勇気と希望を与えてくださいました。



荒武様からは、受傷後の心境の変化や社会復帰までの歩みについてお話しいただきました。当院でのリハビリ生活や車いすラグビーとの出会い、仕事と競技の両立など、支えてくれた仲間への感謝が語られました。現在は父親として家庭生活も大切にされており、その充実した日々の様子が印象的でした。

渡邊様ご夫妻には、Q&A形式でお話しいただきました。車いすで暮らしやすい工夫されたご自宅の事例は、多くの参加者にとって参考となる内容でした。また、結婚を決めたのは勢いとは言うものの「私はあなたの介護のためにいるのではない。あなた自身でできることは手伝わない」という奥様の言葉には、お互いを尊重しながら支え合うご夫婦の関係性が表れており、深い感銘を受けました。



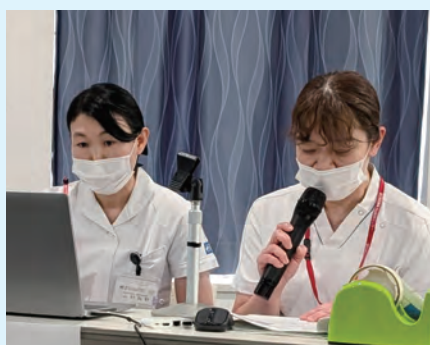
さらに、東京都多摩障害者スポーツセンターの岡崎様からは、同センターの活動や施設について紹介がありました。退院後の体力づくりやスポーツ活動の場として活用できることが示され、様々なトレーニング器具や大きなプールなど、また担当者が見守ってくれるという安心感、退院後の社会参加の1歩に最適な場所であると多くの参加者の関心を集めました。



また、日本せきずい基金理事長の菅原様からは、基金設立の経緯やこれまでの活動に加え、ご自身の経験を交えた講演をいただきました。障害を負いながらも弁護士として活躍されている姿からは、「障害があっても可能性は広がる」という、あきらめない力強いメッセージが伝わり、参加者に大きな勇気を与えてくださいました。

当院担当者からの院内脊髄損傷ケア認定看護師活動報告や脊髄損傷患者への呼吸リハビリテーション、脊髄刺激装置(SCS)についての話もありましたが、やはり当事者の皆様が語る言葉には、実体験に裏打ちされた重みと説得力があり、会場は終始熱気に包まれました。予定時間を超えるほど充実した内容となりましたが、参加者からは多くの共感や学びの声が聞かれました。私たち医療者も、支援のあり方や自身の役割について改めて考える貴重な機会となりました。

当院では今後も、このような「語り」「学び」「つながり」の場を大切にしながら、地域で暮らす皆様とともに、より良い医療・福祉の実現を目指してまいります。ご参加、ご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。



村山医療センター フォトコンテスト2026を 開催いたしました

今回のテーマは「季節を感じる村山医療センター（春～初夏編）」

当院では、広報活動の活性化と職員の士気向上を目的として、「センターフォトコンテスト2026」を開催いたしました。30 作品以上の応募がよせられました。



山田 由美子様
（看護部）



初夏の実り

赤や紫に色づいた可愛い桑の実。初夏の訪れとともに、小鳥たちがこぞって食べにやって来ます。

季節の移ろいを通して見えてくる村山医療センターの新たな魅力。今回のフォトコンテストは、職員一人ひとりが病院への愛着や地域とのつながりを再認識する機会となりました。今後も当院では、このような活動を通じて活気ある病院づくりに取り組んでまいります。

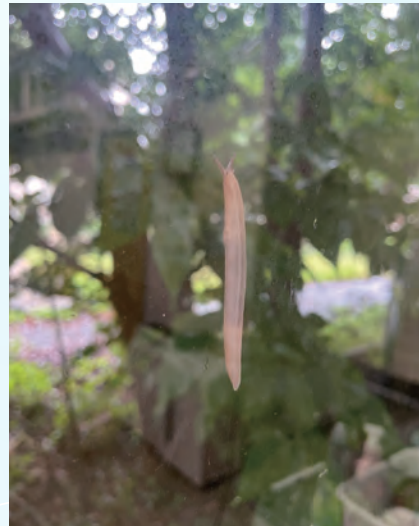


医療DX はじめました！

村山医療センターに、草刈り機とドローンのロボットコンビを導入しました。



長峯 俊幸様
(事務部)



雨上がりの恋人

窓辺の小さな通りに道に、季節を感じました。



小久保 拓海様
(放射線科)



息吹

青々とした紅葉の間からのぞく村山医療センター。早朝の木漏れ日とともに、生命の成長や初夏の訪れを感じた一枚です。



石田 葵様
(臨床研究部)



ラッキードクダミを探して

ドクダミの白い部分は花ではなく葉が変化したもので、5枚以上のものはラッキードクダミと呼ばれているそうです。



小俣 早苗様
(薬剤部)

中学生職業体験を実施しました



令和8年6月に武蔵村山第3中学校の中学2年生が当院で職場体験を行いました。

2日間に渡って医療に興味を持った3名の学生が参加し、初日は検査科、放射線科、理学療法室、2日目は第2病棟、栄養管理室、手術室等で体験を行いました。



検査科では菌を観察し、病棟では車椅子・ストレッチャーの移動体験を行い、手術室では手洗い体験、ガウン着衣、実際に手術台に乗ってみたい等学生の様々な体験を行いました。

各部署において、学生達が熱

心に体験に取り組み、且つ一生懸命メモを取りながら話を聞く姿がとても印象的でした。体験後は座談会を行い、体験について振り返りや質問をしながら和気あいあいと話し合いました。

今回の職場体験を通して、中学生の皆さんが働くことを喜び、大変さ大切を学び、将来医療従事者を目指してくれたら嬉しいです。



2026世界骨粗鬆症デー



キャッチフレーズ

「未来の骨を育てよう!」～家族で骨活フェスタ～

日時：2026年10月18日（日）

10:00～15:00（予定）

会場：武蔵村山イオンモール センターコート

主催：独立行政法人国立病院機構 村山医療センター

社会医療法人財団 大和会 武蔵村山病院・東大和病院

武蔵村山市役所

**実施内容：簡易骨密度測定・結果説明、栄養相談、
骨に良いレシピの紹介、クイズなど**

丈夫な骨作りは、子供の頃からの生活習慣がカギ！
成長期に十分な骨量を獲得することは未来の骨を育てていくことにつながります。そして、毎日頑張っているお母さん世代も今が骨のケアの始め時です。年齢を重ねるごとに減っていく骨量、将来健康的な生活を送るために今から骨を意識した生活を始めることが大切です。「うちの子の骨はしっかり育っている？」「私の骨は元気かな？」家族みんなの未来の骨を考えるきっかけとしてぜひ親子そろって遊びにきてくださいね！

参加者にはもちろん当院マスコットキャラクターの景品が貰えるよ!!



寄付募集の ご案内



当院では、「患者さんの視点に立ち、良質で高度な医療を提供する。」という理念のもと、安全で安心できる診療環境を提供していくことを目的に寄付金を受け付けております。

また、脊髄損傷治療を実践する医療機関として、脊髄損傷患者とともに、社会にでていく障害者ピアサポーターをさまざまな点から応援する活動もしております。皆様からいただいた寄付金は、診療機能向上の果たすための医療機器への購入や外来棟等の建替整備に活用させていただきます。

このような活動の趣旨にご理解いただき、皆様の格別なご支援をお願いいたします。

問い合わせ先：管理課 庶務班長 ☎ 042-561-1221 (代表)

Recruitment

一緒に働いてみませんか

職員募集



募集中の職種

医師、看護師
理学療法士、作業療法士
言語聴覚士、薬剤師
非常勤職員
その他

詳細はホームページをご覧ください▶



ムラゴム

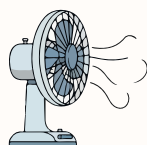
今号の記事：
熱中症にご注意を！

vol.10



暑さが本番を迎えています💧

村山医療センターにも、いよいよ夏の暑さが本格的にやってきました。外に出るだけで汗ばむ日が続いており、熱中症のリスクが高まる時期です。室内でも油断せず、水分補給やこまめな休憩を心がけましょう。車いすラグビー 荒武選手の記事や脊髄損傷を語る会の報告など、見応えのある記事も投稿しているのでぜひご確認ください！



QRコードはこちらから！



外来診療担当医師

令和8年7月1日現在

☐ 一般外来 受付時間：初診8:30～11:00迄 再診8:30～12:00迄

診療科等			月	火	水	木	金	備 考
内科／リウマチ科			片 寄	岡 田	片 寄			
外 科			大 石	飯 野	大 石	飯 野	大 石	
整 形 外 科	再 診	脊 椎	〇〇藤吉 〇古川 〇藤賀	◎小林 〇〇北川	〇橋本 懸上 交代制医師	〇〇許斐 加藤 〇矢内	〇〇谷戸 〇柴田	◎脊髄損傷 〇側弯 脊椎・脊髄 (頸椎・胸椎・腰椎)
		関 節	中村(一)・丸岩		高島・春日	吉 原	笹崎・中村(賢)	股・膝関節・下肢
		肩		吉 田 (第2.3.4週 13:30～)				
		一 般		田 尻		深 田		
	初 診		交 代 制					
リハビリテーション科			堤	植 村	松 田	大 嶋	大 嶋	
歯 科			吉 武 (第 1.3.5 週)	吉 武 (第 2.4 週)	吉 武	吉 武	吉 武	予約制

☐ 専門外来 (全て予約のみ)

診療科等	月	火	水	木	金	備考
脊椎脊髄センター	藤 吉 (9:00)	加 藤 (9:00)	藤吉・小林 (隔週) (9:00)	古川 (9:00)	矢 内 (第1・3週) (9:00)	予約制
内科リウマチ				片 寄 (13:00～)		予約制
装具外来(リハビリ科)	リハビリ科医師 (13:00～)					予約制
側 弯	許斐(第1週 午後) 古川(15:30～)	北 川 (第2.4週 15:30～)	橋 本 (第2.4週 15:30～)	矢内(15:00～) 許斐(16:00～)	柴 田 (15:30～)	予約制
骨粗鬆症 ・ 筋老化					竹光(午後) 矢内(第1・3週 午前) 加藤(貴)(第2・4週 午前) 藤吉(第2・4週 午後)	予約制

※循環器科、皮膚科、精神科、神経内科については、一般外来を行っておりません。

アンケートのお願い

今後の広報誌作成の参考とするため、
読者の皆様のご意見をお聞きかせください。
右のQR コードよりアンケートにご回答いただけます。

「村山医療センターニュース90号」
アンケート